

あし  
き の うま や  
**蘆 城 駅 家**



▲1978年に発掘された蘆城駅家とみられる遺構。

昭和53年(1978)、御笠地区の農地改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、大字吉木の水田下から奈良～平安時代のものと推定される9棟の掘立柱建物跡が発見されました。この建物群は『万葉集』に歌われた蘆城駅家の跡ではないかと推定されました。<sup>(注1)</sup>

「駅家」とは、古代律令国家において中央政府と地方の連絡のため、諸道30里(現在の16km)ごとに置かれた駅のことです。駅には馬が備えられ、駅使たちによって利用されました。また、駅の運営にあたらせるため数十戸の農家を「駅戸」として置き、「駅子」が馬の飼養や田の耕作にあたっていました。蘆城駅家は、大宰府から米ノ山峠を越え、田河道の各駅家を経て都へ至る第一番目の駅でした。

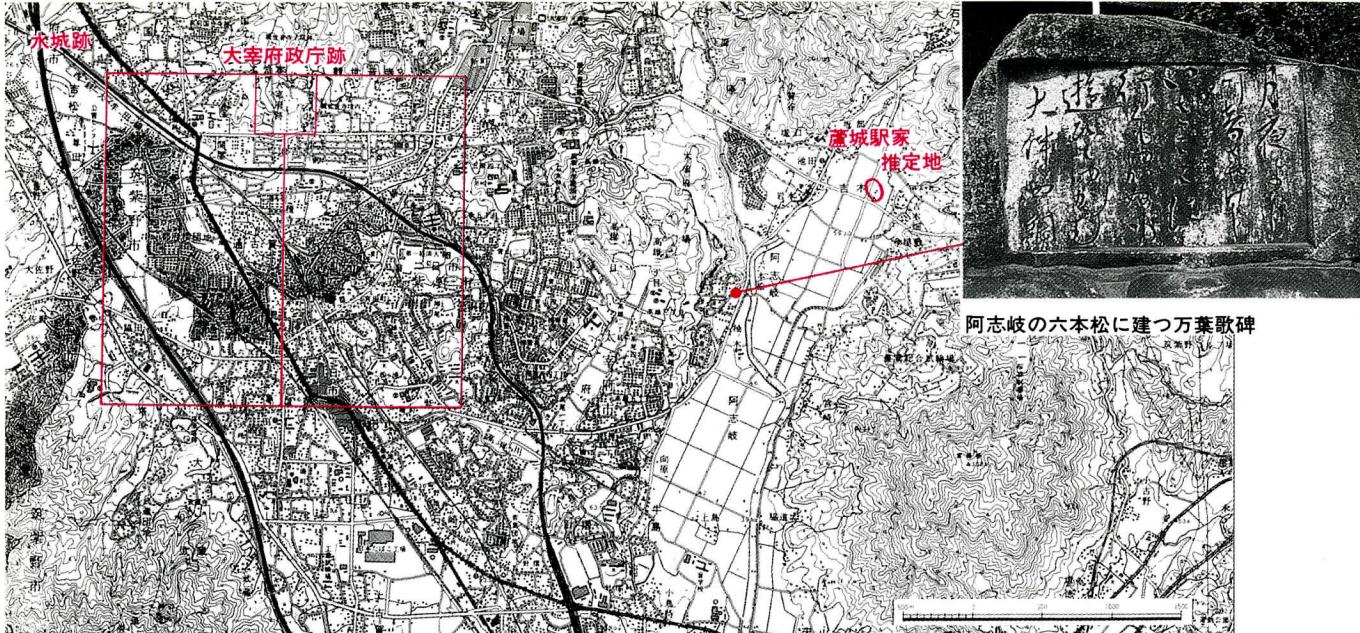
蘆城駅家は『令義解』<sup>りょうぎげ</sup>や『延喜式』には記載されておらず、『万葉集』に収められた神龜・天平年間の9首の歌だけに見えることから、



北部九州の古代駅路

(『古代日本の交通路』IV巻をもとに作図)

設置時期は奈良時代前期で、おそらくとも平安時代前期には廃止されていたと考えられます。これは発掘された建物跡の年代とも、ほぼ一致しています。9棟の建物は、方向からみて3グループに分けられますが、これを建築時期のちがいと考えれば、一時期には2～4棟が建っていたことになります。そのなかで最も大きい建物の居住部分は約3.6m×8.25mで、



三辺に庇（一邊には孫庇）が付けられており、それまでを含めると約7.5m×10.0mの規模になります。万葉の歌は、おそらくこの建物のなかで詠まれたのでしょう。この一帯はたいへん景色が清らかで美しかったらしく、しばしば大宰府官人たちの憩いの場となったようです。歌の内容からも、その景観がうかがえます。

次に9首の歌を掲げます。

五年戊辰（728年）、大宰小貳石川足人朝臣の遷任するに、筑前国蘆城驛家に餞する歌三首

549 天地の神も助けよ草枕旅ゆく君が家に至るまで

550 大船の思いたのみし君が去なばわれは恋ひなむ直に逢ふまでに

551 大和路の島の浦廻に寄する波間も無けむわが恋ひまくは

右の三首は、作者未だ詳らかならず大宰帥大伴卿、大納言に任けられて京に臨入むとする時に（730年）、府の官人等、卿を筑前国の大芦城驛家に餞する歌四首

568 み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居てもわが思へる君

右一首、筑前掾門部連石足

569 韓人の衣染むとふ紫の情に染みて思はゆるかも

570 大和へに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿も響みてそ鳴く

右二首、大典麻田連陽春

571 月夜よし河音清けしいざここに行くも去かぬも遊びて帰かむ

右一首、防人佑大伴四綱

大宰の諸卿大夫と官人等と筑前國の蘆城驛家に宴する歌二首

1530 女郎花秋萩まじる蘆城野は今日を始めて萬代に見む

1531 珠匣蘆城の川を今日見ては萬代までに忘られめやも

右の二首は、作者詳らかならず

蘆城は、現在では阿志岐と書き、大字名となっています。大字阿志岐の範囲は、おおむね江戸時代の阿志岐村にあたります。

また、隣接して大字吉木（かつての吉木村）がありますが、『筑前国統風土記拾遺』によると、吉木が阿志岐から分かれたのは、慶長（1596～1615＝安土桃山時代）のころであったと記されています。それ以前は、この両者を含めた地域が蘆城といわれた地であったろうと思われます。

註1. 蘆城駅家の所在地については、江戸時代から関心がもたれていました。貝原益軒は『筑前国統風土記』のなかで、「宰府の南にあり。蘆城の驛とて、むかし宰府より都へ行馬次の宿なり。蘆城より米の山と云所を通りしとなん」とし、青柳種信は『筑前国統風土記拾遺』で「萬葉集」や「宗祇紀行」にふれ、往時を偲びながらも「驛家の跡は今さだかならず」と記しています。